固き世に投入れられた優しさ

――ホーソーン短篇論(1)「優しき少年」――

三宅卓雄

文学史上、ある作品が発表されてその時にはそうとは気づかれなかったことが、後になって一大事件であったこととして振返られることが少なくない。一八三一年末に出た年刊誌 *The Token* の一八三二年号はアメリカ文学史上のそのような事件の一つとして今から振返られてもいい。何故ならその号にホーソーンの四つの作品が一挙に匿名で掲載され（作者名を出してはいっぺんにそんなに幾つも載せては具合が悪いというのがその編集者サミュエル・グッドリッチの考えだったという！）[1]、そのうちの二篇が現代の評価でホーソーンの最高傑作に数えられる "My Kinsman, Major Molineux" と "Roger Malvin's Burial" であり、他の一つが "The Gentle Boy" であったのだ。そしてこれらの作品は実はそれより二年前の一八二九年のうちに書き上げられていたことが確かめられている。[2] それは即ちホーソーンが二五才の時ということである。この年齢を考えると先程の〝事件〟の意味は一層深くなる。文学史上早熟な天才というものにはこと欠かないが、この時点にあってホーソーンも確かに天才の輝きを発している。大学を出てから四年目、読書と創作の文学修業に専心しながらそれまで匿名で発表した長編一つといくつかの短篇はいずれも習作の域を出るものではなかった。それがこの年、その後の全生涯でも

深さと完成度においてそれを凌駕するものを遂に書けなかった類の作品を書いてしまったのだ。しかもこれらの傑作の中に良い意味でも悪い意味でも作者の〝若さ〟を探ることは不可能だ。作家の発展とか成熟という概念からするとこれは不思議な例である。

さて、そのようにして発表された四篇のうち先に記した三篇であるが、五〇年代以後のニュー・クリティシズムによるホーソーン批評によって、「親戚モリヌー少佐」は後の「青年グッドマン・ブラウン」（"Young Goodman Brown"）と並んで或はそれ以上に高い評価を受け、「ロウジャー・モルヴィンの埋葬」もそれに近い評価を与えられている。それらに比べて「優しき少年」の方の再評価はそれ程高くはない。というよりも、発表当初から好評を博したこの作品は当時の一般読者にとって直ちに理解され易いものであったということであり、それはとりも直さず現代のニュー・クリティシズム流の複雑好みの批評には向いていないということなのだ。確かにこの作品には現代の（アカデミックな？）読者を喜ばせるような複雑さ――曖昧さ、アイロニー、シンボリズム、更にお望みなら神話性――といった要素は薄い。だが私見によれば、にも拘らずこの作品は大いに興味深いものであり、特にここにはホーソーンが他では書かなかったことが見事に書き込まれているのであり、しかもその事柄は現代に生きる我々にとっても大変心をそそられる何かであるのだ。ここには十七世紀ニューイングランドにおける一つの人生が書き込まれていて、その人生の悲劇性はまた十分に現代のものでもあるのだ。（以下本論に入るがこの作品に関してのこれ迄の批評・解釈の概要について後注を付しておく。[8]）

一、固き世

物語は簡単である。プロローグがあって一六五〇年代マサチューセッツ州におけるピューリタン植民者達とそ

こに新たに侵入してきたクエイカー達の間の抗争、というよりは前者による後者の迫害の歴史的背景が述べられる。本文は四部に分けられ、その第一で、クエイカーの初めての処刑が行われた秋の寒い夕暮れ、トバイアス・ピアスン（Tobias Pearson）というピューリタンが処刑場の木の下で泣いている少年を見つける。そのイルブラヒム（Ilbrahim）という五、六才の少年はその日処刑されたクエイカーの子供で、ピアスンは同情して引きとることにして家へ連れて帰る。妻のドロシー（Dorothy）も深く同情して自分達の死んだ子供の代りとして彼を育てていくことにする。しかし周囲のピューリタン達はそういうピアスン夫婦に白い眼を向け始める。第二部で、それから二週間目の日曜日、夫婦は少年を連れて教会へ出かける。礼拝の最中に一人のクエイカーの女、少年の追放された母親キャザリン（Catherine）が説教壇に上り熱狂的な弁を振う。母子の対面となるが追放の身の母親はピアスン夫婦に子を託して荒野へ追われる。第三部で、春になると少年もピアスン夫婦に対する親しみを増し明るい性質も発揮するようになる。近所のピューリタンの子供達は彼を受入れず彼は孤独であったが、偶々ケガを負った子供がピアスン家に運び込まれて養生するうちにイルブラヒムは彼と友達になる。夏の一日、既に回復したその子供が外で大勢の子供達と遊んでいるのを見たイルブラヒムが喜んで彼等の中に入って行くと、彼等は突然彼に襲いかかり、友達であった筈の少年も彼を打ちすえ傷を負わせる。その後イルブラヒムの肉体の傷は直っても心の傷は癒えず、第四部で、一年余り後の冬の一夜遂に死の床についている。イルブラヒムを引きとることから始まったトバイアス・ピアスンのクエイカーへの徐々の傾斜はこの頃までに完了し、彼はその宗派に改宗しているが、今子供を失う非運に直面してその信仰に何の力も見出せない。吹雪の中をキャザリンが訪ねてきて英国王の命によりニューイングランドにおけるクエイカー迫害が停止されることになった知らせを告げ、イルブラヒムは遂に母親に抱かれて死ぬ。エピローグではその後の宗派抗争の納まり方とキャザリンの死までの後の

消息を記して終る。

本稿の標題にいう〝固き世〟とはどういう世界のことか。第一にそれは十七世紀のピューリタン社会そのもの、「その頃まだ鐘というものがなかったので軍大鼓が礼拝の開始を告げ」、人々を「聖なる黙想」に「召集」した社会、教会の中では真ん中の広い通路が夫婦といえども左右に男女を分ち、そこで牧師の説教だけでゆうに「一時間半を越える」礼拝式が行われる社会。しかしそれだけならいいのだ。人々は一時間半の説教を聞いたあとで尚長いお祈りをして「聖なる」心地で家路につくだろう。固き世が恐るべき様相を呈するのは、牧師の説教のあとで突然髪をふり乱した女が壇上に上り、彼等の社会と信仰を真向うから否定し呪詛し始める、そういう時だ。狂信とは、信念が精神を縛りつけてその自由性を殺し、行動を支配することだが、そういう一つの狂信がもう一つの狂信とぶつかりあう時、そこに迫害と報復の修羅場が現出する。クエイカーとピューリタンが抗争する十七世紀中葉のピューリタン社会、それを標題の〝固き世〟は意味する。

そのような世を描き出すことにおいて重要なことは、ホーソーンが迫害する側とされる側のどちらに対しても批評の眼を向け、微妙なバランスにおいて作品世界を自立させていることである。[4] そしてそこで尚重要なことは、そうするのに作者はAも悪いがBも悪いといったていの粗雑な議論によってではなく、いわば文体そのものによってそうしていることである。だからそのことを示そうとすれば引用によるしかない。次はプロローグ冒頭の一節である。

In the course of the year 1656, several of the people called Quakers, led, *as they professed*, by the inward movement of the spirit, made their appearance in New England. Their reputation, as holders

of mystic and pernicious principles, having spread before them, the Puritans early endeavored to banish, and to prevent the further intrusion of the rising sect. But the measures by which it was intended to purge the land of heresy, though *more than sufficiently vigorous*, were entirely unsuccessful. The Quakers, esteeming persecution as a divine call to the post of danger, laid claim to *a holy courage, unknown to the Puritans themselves, who had shunned the cross, by providing for the peaceable exercise of their religion in a distant wilderness.* Though it was the singular fact, that every nation of the earth rejected the wandering enthusiasts who practised peace towards all men, the place of greatest uneasiness and peril, and therefore, in their eyes the most eligible, was the province of Massachusetts Bay.

The fines, imprisonments, and stripes, *liberally distributed by our pious forefathers*; the popular antipathy, so strong that it endured nearly a hundred years after actual persecution had ceased, were attractions as powerful for the Quakers, as peace, honor, and reward, would have been for the worldly minded. (p. 68)[9]　(イタリックは筆者。以下の引用についても同じ)

"as they professed" という作者の側での留保、"more than sufficiently vigorous", "liberally" に "our *pious forefathers*" によってクエイカー達に加えられた刑罰。アメリカ建国の父祖であるピューリタン達のことを、「(本国での)十字架を避けて遠い荒野で無事に信仰を果そうとした、聖なる勇気を知らぬ人々」といってのけた十九世紀のアメリカ作家が他にいただろうか。この一節ではホーソーンの共感は迫害されるクエイカーの側に厚くみえる。だが彼はやはり次のようにも書く。

Their enthusiasm, *heightened almost to madness* by the treatment which they received, produced actions contrary to the rules of decency, as well as of rational religion, and presented a singular contrast to the calm and staid deportment of their sectarian successors of the present day. The command of the spirit, inaudible except to the soul, and *not to be controverted on grounds of human wisdom*, was a plea for most indecorous exhibitions, abstractedly considered, *well deserved the moderate chastisement of the rod*. These extravagances, and the persecution which was at once their cause and consequence, continued to increase, till, in the year 1659, the government of Massachusetts Bay indulged two members of the Quaker sect with the crown of martyrdom. (p. 69)

ホーソーンにとって、"human wisdom", "rational religion" というものが世界の価値の中心であるから（後にふれるドロシーがそれを体現する）、それからふみはずれたクエイカーの行状は「ある程度の笞うち刑に価する」と考られても仕方がない。クエイカーに対するこのようなバランスの感覚はキャザリンという具体的な人物の描写のうちにも貫かれる。彼女が説教壇に上ってあっけにとられている会衆に語り始める時の描写——

Her discourse gave evidence of an imagination hopelessly entangled with her reason; it was a vague and incomprehensible rhapsody, which, however, seemed to spread its own atmosphere round the hearer's soul, and to move his feelings by some influence unconnected with the words. As she proceeded, beautiful but shadowy images would sometimes be seen, like bright things moving in a

turbid river ; or a strong and singularly-shaped idea leaped forth, and seized at once on the understanding or the heart. (pp. 79-80)

ここには固いピューリタン達が持合せずしかも彼等の「胸」に直接訴えかける何ものかがある。だが彼女の弁が自分達に対するピューリタン達の迫害のことに及ぶと、「憎しみと復讐の念が信仰の衣をかぶって」ほとばしり出、非難は「ほとんど悪魔的な」激しさをおびる。そして彼女自身この「悪意の奔流を神からの霊感と思いこむ」のだ。

先に引いたプロローグからの引用にも明らかなように、ピューリタンがクエイカーに対してやったことは「ある程度の懲罰」をはるかに越えたもので許さるべきものではない、という批判のトーンは作品全体を貫いているけれども、ホーソーンの主眼はそのような断定を打出すことでなく、やはり引用にも明らかなように、クエイカーの行状とピューリタンの行為が互いに「原因・結果」の相乗的連鎖反応をなしていった、として提示することであった。それによってここに描かれた社会は、十七世紀中葉のニューイングランドという歴史的具体性は失わないままそれ以上の一つの象徴にまで高まる。一の狂信が他の狂信をよび、互いに強めあいながら破壊しあう人間社会、という。

二、優しさ

さて、そのような〝固き世〟に投げ入れられた少年イルブラヒムの〝優しさ〟とはいかなるものであるか。優しさ（gentleness）の本質は他との争いを好まぬ、争いに耐えぬ、ということにあるだろう。云いかえれば他への悪意の欠如である。イルブラヒムの本性はまさにそのようなものである。それは本来弱いものだ。〝優しい愛〟

は強くありうるが、優しさそのものはひ弱なものである。

His mind was wanting in the stamina for self-support; it was a plant that wonld twine beautifully round something stronger than itself, but if repulsed, or torn away, it had no choice but to wither on the ground. (p. 87)

だとすれば、このような性が何かを支えとして「美しく」伸び拡がってゆく可能性は、狂信と非寛容が支配する当の〝固き世〟にあっては初めからない。両者は全く逆のものなのだ。その通り、それは初めからそこに生じたものではない。〝投げ入れられた〟と書いた通り、それは外から、「遠い異教の国からたどり着いた小さな放浪者」だった。少年は両親がキリスト教世界を転々と追われてトルコに滞在していた間に生れたのであり、Ilbrahim という名は、両親が異教の王の親切に感謝してつけた東洋風の名であった。だが彼は、以上述べてきたところからそう思われるかも知れぬような抽象的な「優しき少年」ではない。抽象的な存在に悲劇は起りえない。悲劇は、少年が、クエイカーとしての両親の子であり、彼自身がクエイカーであること、即ち彼自身その優しさのままで当の〝固き世〟にまさに関わる存在であったことから起る。

彼が養父母による改宗への熱心な働らきかけにも拘らずクエイカーであり続けるということには、それが実の父母がそのために命をさえかけてきた信仰であるから、という理由のほかに、彼のような優しさこそ本当のクエイカリズムにふさわしいという意味があるだろう。だから彼がピューリタンの子としての近所の子供達から無抵抗のまま打ちすえられる時、(... all at once, the devil of their fathers entered into the unbreeched fanatics, and sending up a fierce shrill cry, they rushed upon the poor Quaker child.) (pp. 89-90) それは〝固き世〟

に蹂躙される無垢な優しさという象徴性と重ねて、父親の殉教に続く、いやそれより更に純粋なクエイカーの殉教を意味するのである。（少年の肉体の死は尚しばらく先であるが、彼の心はこの時既に死んだというのがこの事件のあとのホーソーンの叙述である。）

当時のピューリタン社会の人間でこのような異端の徒の子供を受入れることが出来る人間は二種類しかないだろう。即ち、ピューリタンの体制の枠内にありながら、その枠にとらわれない人間と、その枠からこぼれ落ちる人間である。トバイアス・ピアスンが後者、その妻ドロシーが前者である。

ドロシーとは狂信なきピューリタン、偏見なき強い信仰者のことである。ホーソーンのピューリタニズムに対する考え方はどうか、というのがよく問題とされるが、彼の理想とするところは一番初期のこの作品のこの人物一人をもってくれば足りる。そして彼はこの人物を“rational piety”という二語に要約する。具体的にいえば、クエイカーの女に対峙して、“No, we are not of your people, but we are Christians, looking upward to the same heaven with you.”（p. 84）と云えるピューリタンである。

だが理想像というものは一通り示されればそれで十分であって、ホーソーンも当然ドロシーに文学的意欲をかきたてられるようなことはなく、筆は専ら別種の人間トバイアスに向う。筆者が一番語りたいのも彼についてである。

三、転ぶ人

筆者は初めにこの作品には一つの人生が書きとまれているという云い方をした。それはトバイアスについてのことなのだが、それは二つの意味においてそうなのだ。人生とは過去であり、過程である。トバイアスについて

その二つながらをホーソーンは書きこむ。そしてこれは彼がその後の全作品を通じてもここほどには二度とやらなかったことだ。成程長編『緋文字』の例を考えれば、ヘスターとチリングワース両人についての故国イギリスでの前歴が触れられはする。だがそれはこの短篇におけるトバイアスについて程ではない。（勿論前者においてそれが不足であると云っているのではない。）そして、過程ということ――。成程、ヘスターの、ディムズデイルの内面が詳細に描かれはする。だがそれらは、結果としての現在の彼等の心の状況であって、情事のあとの二人の七年間の過程は語られていない。青年グッドマン・ブラウンは一夜にして人が変る。ドナテロ（『大理石の牧神像』）の「変貌」も一つの行為の結果突然起る。そのようではなく、トバイアスにおいてはまさに心の変化の過程が人生そのものの過程として語られるのだ。

第一部でトバイアスの過去が語られるところの冒頭に、彼は「英国からの一番初期の移民には属していなかった」とある。後続隊の一人であったわけである。このことは既にこの男が第一陣のピューリタンに比べて信仰の強固さという点で同じでないことを暗示するだろう。彼はクロゥムウェル側の騎兵旗手として内戦（一六四二―四九年）に参加していたが、クロゥムウェルの野心が見え始めると「既に神聖さを失った戦い」に見切りをつけて戦線を去る。この時彼は〝信仰のための戦い〟に最初の挫折感を味わったと云っていいだろう。それから「信仰を同じくする人々の植民地」へ渡るのだが、その際信仰のためより「もっと世俗的な考慮が彼をそこに誘った」としても、けだし当然といえるだろう。何も大して卑俗な目的を抱えて行ったわけではない。ただ子沢山の生活をもっと楽にしてやることが出来るだろうと考えたのだ。（それは多くの植民ピューリタン達の現実だった。）ところが厳しい植民生活の過程で次々と全ての子供達を失ってしまう。そこをより強固なピューリタン達は突いて、彼の「不純な動機」に対する天罰だと云いたてる。スタートからいくらかは確実にあったトバイアスと体制

派ピューリタンとの間の内的距離がこうして徐々に大きくなっていたそういう時に、彼はクエイカーの子供を拾う。彼がその子供が「呪われたセクト」のものであると知った上で尚かつ引き取ろうと決心する時の思考は「我々はすべて一つの悪しき源から生れてきているのではないか？天の光が輝く時まで我々は皆暗やみの中にいるのではないか？」ということだが、それは他のピューリタン達が少年から身を避けながら云う「我々はお前より神聖なのだ」という言葉と見事な対比をなし、両者の距離を明らかにする。だがこの時点では彼はまだいささかもクエイカーに共感をもっていない。少年を「呪われたセクト」から改宗させようと考えている。彼が初めて揺らぎを感じ始めるのは、自分達の宗教の迫害で親を失った（母親も追放されている）子供を引取ったことで、今度はその迫害が自分に向けられ始める時である。周囲からの白眼、誹謗というやつだ。ここでホーソーンはトバイアスの現在の社会的地位を書きこんでおくことを忘れない。彼は「不純な動機」を誹られ損とはせず、ちゃんと成功し、州議会の議員と軍の副指揮官（liutenant）を兼ねる「かなりの地位の人物」となっている。地位ある人物であればこそ周囲の白眼誹謗は度を増すだろうし、孤立し始めると一層それがこたえるのもなまじ地位にある人物だ。「背く者よ」（backslider）というような非難が彼の潜在意識の中に沈んで或る作用をひき起し始める。

These insults irritated Pearson's temper for the moment; they entered also into his heart, and became imperceptible but powerful workers towards an end which his most secret thought had not yet whispered. (p. 76)

続く第二部では、事件そのものはあら筋の紹介にみた通り簡単なことである。だが実はこの部分が全篇の中で一番長い。それは二週間後の教会におけるキャザリンとピアスン夫婦の出合いを描くホーソーンの筆が微妙を極

めているからだ。そしてそのことに関して結論的なことを云えば、ここを読んで我々が驚いていいことが一つある。それはこれだけ念入りに描かれている場面を通じて、熱狂的な弁を振うキャザリン、そして彼女に堂々と言葉で対応するドロシーに比して、トバイアスは一緒にそこにいて一語も発しないということだ。ここで彼は終始視られる人間としてある。

先ず教会に入ってゆく時会衆の視線にひるまねばならない。その際のドロシーとの対比――。

Pearson found it difficult to sustain *their united and disapproving gaze*, but Dorothy, whose mind was differently circumstanced,... faltered not in her approach. (p. 77)

そして彼はドロシーにも見つめられる。キャザリンが壇から下りてわが子を抱きしめる愁嘆場で、

Tobias Pearson was agitated and uneasy, but a certain feeling like the consciousness of guilt oppressed him, so that he could not go forth and offer himself as the protector of the child. Dorothy, however, *had watched her husband's eye*. Her mind was free from the influence that had begun to work on his... (p. 83)

そして次にキャザリンによってさえも。いや、さえもなどと云うべきではない。トバイアスの精神の現在の揺れの方向を考えれば、このクエイカーからの視線こそ重要である。キャザリンがドロシーに、わが子の保護者となるあなたの夫はどこにいるかと問いかける時彼は遂に進み出る。

She turned her face upon the male auditors, and after a momentary delay, Tobias Pearson came forth from among them. The Quaker saw the dress which marked his military rank, and shook her head ; but then she noted the hesitating air, the eyes that struggled with her own, and were vanquished ; the color that went and came, and could find no resting-place. As she gazed, an unmirthful smile spread over her features, like sunshine that grows melancholy in some desolate spot. (pp. 84-85)

キャザリンは最初クエイカー迫害の体制の維持者としての彼の服装を見て恐れる。だが彼の眼の中にその身分を裏切る不安な揺れを見てとる。自分の視線に動揺し屈する頼りないピューリタンは、わが子のためにはともかく守り手となるだろう。この男ひょっとすると転ぶかも知れぬ、多分そう思った時に彼女の顔に「暗い笑み」が浮んだのだ。[6]

こういうふうに、視られることが最も苦しい時にこの人物は専ら視られている。そして視られることの重圧の故に彼の内的過程は一層進んでゆく。ホーソーンの作品群の中に視る人物は『ブライズデイル・ロマンス』中のカヴァデイルを典型として多く登場する。『緋文字』のチリングワース、『七破風の家』のホルグレイヴ、『大理石の牧神像』のケニョン等その系列上にある。それと逆の視られる人物の方は多くない。ディムズデイルがまさにそれだが、トバイアスの方が視られることの意味をはるかに集中的に体現している。この意味でも、すぐれて現代文学的な嗜好に属する事柄の一つをホーソーンは一番初期のこの作品で書いてしまったのだ。

この人物の〝転び〟の過程は更に複雑な心理を内包してゆく。一の信仰から他の信仰への直線的な改宗などではない。既に触れておいたように、イルブラヒムを拾うまでに彼の心と体制的ピューリタンの信仰との間には隙間が出来ていた。彼は自分の信仰心の冷え（a state of religious dulness）を意識し、何かもっと強い信仰を求

めていた。そういう時に起った、少年を通じてのクエイカリズムとの直接的な接触の影響の過程を、ホーソーンは人物の心理の屈折をそのままに感じさせる文体で書いてゆく。ここでもまた全体を引用しなければならない。

The first effect of his kindness to Ilbrahim was to produce a softened feeling, and incipient love for the child's whole sect; but joined to this, and resuting perhaps from self-suspicion, was a proud and ostentatious contempt of all their tenets and practical extravagances. In the course of much thought, however, for the subject struggled irresistibly into his mind, the foolishness of the doctrine began to be less evident, and the points which had particularly offended his reason assumed another aspect, or vanished entirely away. The work within him appeared to go on even while he slept, and that which had been a doubt, when he laid down to rest, would often hold the place of a truth, confirmed by some forgotten demonstration, when he recalled his thoughts in the morning. But while he was thus becoming assimilated to the enthusiasts, his contempt, in nowise decreasing towards them, grew very fierce against himself... (p. 91)

イルブラヒムへの親切の最初の結果は彼の心にやさしい感情をめざめさせ、クエイカー派全体に対する同情を生じさせることになった。しかしその感情には、おそらくそういう自分自身への懐疑の念から生じたものであろうが、そのクエイカー派の教義や信徒達の常軌を逸した行動すべてに対する傲慢な明らさまな軽蔑心が混じっていたのである。だがクエイカーの問題がいやでも念頭に上ってきて熟考を重ねているうちに、彼等の教義のおろかさ自体はそれ程問題とならなくなってきて、以前には彼の理性に特に逆らったことどもが違った相をおび始めるか、或は全く霧消してしまうようになった。彼の内面の

変化は眠っている間にも進行してゆくようであった。夜床についた時にはまだ疑いとしてあったものが、朝になって思い出してみると、眠りのうちに想起された何かの事実で補強されて、真理の位置を占めるにいたっているということがよくあった。しかしこのようにクエイカー派に同調し始めている間も彼等に対する彼の軽蔑は決して減じてはゆかず、今や自分自身に対してそれが強く向けられるのだった。

新しい宗旨に対する反感と好意、軽蔑と敬意、懐疑と首肯、といったアンビヴァレンツが次第に一方へ傾いてゆく。しかしはっきりそちらに傾いてゆくにつれてそれと逆に自己嫌悪に陥ってゆく——。十七世紀の人物を描いて何と悲劇的な近代的自我をホーソーンは描き出していることだろうか。

さて、こういう状況にある時に、第三部における事件——ピューリタンの子供達がイルブラヒムを襲い打ち倒す——が起り、これがトバイアスの心に結着をつけさせる。改宗は決定的となる。だがクエイカーへの改宗によって彼が求めていた本当の救いを得ることが出来たかというとそうではない。それから丸一年余りの後、第四部における彼の姿は一層惨めである。改宗によって社会からの迫害は物理的に本物となり、地位を失い財産を奪われ、残るのは机の上の聖書だけというのに、今や最愛の子イルブラヒムが死にかけている時、その聖書が何の慰めにも力にもならないという有様。そして今また彼は心中の動揺を人に見つめられている。今度は信仰上の先達である一人の毅然たる老クエーカーに。

The Quaker at length closed (the Holy Book), ... *while he looked steadfastly at Pearson.* The attitude and features of the latter might have indicated the endurance of bodily pain; he leaned his forehead on his hands, his teeth were firmly closed, and his frame was tremulous at intervals with a

nervous agitation.

"Friend Tobias," inquired the old man, compassionately, "hast thou found no comfort in these many blessed pages of Scripture?"

"Thy voice has fallen on my ear like a sound afar off and indistinct," replied Pearson without lifting his eyes. "Yea, and when I have hearkened carefully the words seemed cold and lifeless, and intended for another and a lesser grief than mine. Remove the book," he added, in a tone of sullen bitterness. "I have no part in its consolations, and they do but fret my sorrow the more." (pp. 93-94)

これは何という惨さであるか。この描写は成程最愛の子供が死にかけているという特に心痛の深い場面のことであるが、まず慨ねこのような状況がトバイアスの改宗後の状況だと云ってよいだろう。作者はこのあと彼の内面の事柄に関してはほとんど何もつけ加えない。エピローグでの明るい後日談はキャザリンに関してのみである。

このようなトバイアスの悲劇とは一体何であるか。それは本稿の初めに考察したような〝固き世〟におかれた一個の真正な個人に起る悲劇である。固き世をなす一方の体制に疑問を抱いてそれに留まることが出来なくなり、そこからこぼれ落ちて他の側に移ろうとして、それが出来ない。だがそれは出来なくて本当なのである。その他方の側が一方の側の単なるアンチテーゼである限りは。そしてそれが固き世というものなのだ。二者択一以外の余地がないという状況。それは畢境、文化がないという状況のことだ。トバイアス・ピアスンという一個の精神は十七世紀ニューイングランドのそういう状況で成熟をとげえずして立枯れる。そして、無論イルブラヒムという一個の性質もまた双葉のままそこに枯死したのだ。後者が前者をひき起したのがこの一篇の二重の悲劇である。

さて、この作品をこのように読み切ったところで我々は、二五、六才のホーソーンがこの作品を書いた意味というものを考えざるをえない。若い彼が一体どうして年齢も中年の一人のピューリタンの〝転び〟の心理をこのように詳細に書きこんだのだろうか？ここには、彼が同じ頃に「親戚モリヌー少佐」を書き、少しあとで「青年グッドマン・ブラウン」を書き、もっとあとでディムズデイルを描いたことなどとは何か違うものがありはしないか。注3の中であげておいた Louise Dauner もその違いに注目したのだが、そこで彼女の結論は、トバイアスが作者の自画像だというのだ。ホーソーンは他のどの作品の中でも自分を隠しているがこの作品のトバイアスにおいてだけ自分をそのまま語っているというのだ。あんまり納得のゆく議論ではない。

我々はここで『緋文字』の序章「税関」の中の有名な個所――作者が自分のアメリカにおける第一代の先祖・ウィリアムのことを語っている個所――を思い出すべきだ。

> ...He was a soldier, legislator, judge; he was a ruler in the Church; he had all the Puritanic traits both good and evil. *He was likewise a bitter persecutor, as witness the Quakers,* who have remembered him in their histories, and *relate an incident of his hard severity towards a woman of their sect.*[7]...

この一代目のクエイカーに対する迫害の罪悪及び二代目のジョンのセイレムにおける魔女狩りへの加担の罪悪が子孫の作家ナサニエルの心に暗いオブセッションとなっていたことはよく知られている。先祖ウィリアムは明瞭にトバイアスとは逆のもの、固き世の体制維持者そのものであり迫害者であった。その先祖の罪を暗く感じているホーソーンが、やはりピューリタンの権力者の一人としてのトバイアスという人物の転びの心理をあのように書き込んでいったのには、無意識のうちの先祖の否定、先祖もまたそのようであったらという願望がはたらいて

いたのであるまいか。贖罪として書いたというようなことではない。しかしあの転んでゆく男のポートレートの中には、ホーソーンの心の底のいわば罪障払いの意識といったものが働いていたように思われる。

（注）

① Randall Stewart, *Nathaniel Hawthorne : A Biography* (Yale, 1948), p. 31.

② *Ibid.*, p. 30.

③ 先ず、この作品が一八三七年に *Twice-Told Tales* に再録される際にホーソーンは改訂を行った（即ち幾つかの部分の削除を行った）が、その初版と改訂版との比較検討を行った Seymour L. Gross, "Hawthorne's Revision of 'The Gentle Boy'," *American Literature*, 26 (1954) が基本的に重要である。それより少し古い Louise Dauner, "The 'Case' of Tobias Pearson ; Hawthorne and the Ambiguities," *American Literature*, 21 (1950) はその 'case of Tobias Pearson' という云い方が本稿の第三章と関連が深そうにみえるが、Dauner がトバイアスは副次的な人物で「我々の関心を主にひきつけるのはイルブラヒムとキャザリンである」と述べていることからして筆者とは根本的に違うし、本稿の最後のところでトバイアスの見方の上での重大な違いを述べるであろう。Roy R. Male, *Hawthorne's Tragic Vision* (Texas, 1957) 中の短いが鋭い考察が、Michael D. Bell, *Hawthorne and the Historical Romance of New England* (Princeton, 1971) によって敷衍され、この作品のテーマ批評はこれで一つは確立したといえよう。即ちこの作品はピューリタン植民者がアメリカの「荒野」に新しい「家」を確立しようとして挫折する悲劇を書いたものという読み方である。これは魅力的な読み方であるが論者の側でテーマを〝組立てる〟といったきらいがなくもない。本稿ではそういうアプローチはとっていない。Frederick C. Crews, *The Sins of the Fathers : Hawthorne's Psychological Themes* (Oxford, 1966) は他の作品に対すると同様この作品にも精神分析学的な刺激的な解釈を施す。「父なるもの」を求めてすべてに裏切られる「子」の悲劇という解釈だが、力むあまり所々妙な議論があり、後に指摘するようなテクストの誤読もある。最後に、Neal F. Doubleday, *Hawthorne's*

Early Tales, A Critical Study (Duke Univ., 1972) は作品の歴史的背景とかソースに関する多くの知識を与えてくれ実に有益であるが、作品解釈は穏健なものである。

④ 前掲 Seymour Gross の論文が指摘する通り、ピューリタンへの批判きびしくクエイカーへの同情厚いということを示しがちな原作の部分を削除して両者のバランスをとることが作者の改訂の主眼であった。

⑤ テクストは H. H. Waggoner ed., *Hawthorne : Selected Tales and Sketches* (Rinehart, 3rd edition).

⑥ Frederick Crews は前掲書（六七頁）で、作品のこの部分を、キャザリンはトバイアスの動揺ぶりを見てこの弱い男は結局わが子を迫害の手にゆだねることになるだろうと直感している、というふうにとっている。これは Crews が自分の解釈の筋を通そうとしてこの微妙なパッセージを誤読しているのだ。

⑦ *The Scarlet Letter* (Ohio State Univ., 1962), p. 9.